

アルテアの魔女 6

続編第二部
死神の継承者とアルテアの魔女

たつみ暁

『アルテアの魔女』続編第二部

死神の継承者と

アルテアの魔女

Saints

プロローグ 取り戻せない命

見渡す限りの焦土だった。

どれだけの命が生き残っているのかなど、わかりやしない。いや、そんなものに興味など無い。想うのは、ただ一人。

彼女はどこだ。血塗れの身体を左右に揺らしながら、灰の降り積もった地面を踏み締めてゆく。まだあちこちの建物から黒い煙が立ちのぼり、炭化した屍が靴先に当たっても、気に留める事無く歩を進める。

太陽が東から昇る。三日三晩漆黒の闇と紅蓮の炎ばかりに包まれたこの地に朝が訪れても、青年の心に夜明けがやってくる事は無かった。絶望に心の奥まで暗く塗り込められ、どこに希望があるかなど、見当もつかない。

ふらふらと。赤黒く染まった海面を見渡せる岸壁まで出て行って、水平線から顔を出して新しい朝を告げる光を憎々しげに見すえる。闇に慣れた目に陽光はまぶしすぎて、勝手に涙が溢れた。直視するのが辛くなって顔を逸らしたその時、視界にひとつの墓が飛び込んできた。これだけの惨劇の後でも無事に残っているその墓標を見て、天啓のように彼はひらめいた。がばりと墓石に取りすがり、すすのついた表面をなぞりながら、へらりと笑いを浮かべる。

そうだ。取り戻せる。

きっと彼女を取り戻せる。

彼女の血潮で作られた石を口に含み、濁った瞳で彼は願う。

『生き返って』

代償などどうでもいい。彼女をこの手に抱けるのならば。

『生き返って。僕の傍にいてよ。僕の大事な大事な——』

1 アイドゥールの冬

フェルム統一王国首都アイドゥールには、四季がある。

鳥が謡い蝶が舞い、花咲き誇る春。暑い日差しが地上を照らす夏。実りの秋を経て、やがてしんと雪の降る冬がやってくるのだ。

王都も銀世界に埋もれる、そんな冬のある一日。

「大丈夫だ、落とせ！」

地上から呼びかける青年の合図に声で応える代わりに、同じ顔をした少年は、平屋の屋根に積もった雪をスコップで勢い良くかいた。積もりに積もった天からの舞い人は、どさどさどさどさつと風情もへつたくれも無い音を立てて地面に落ちてゆく。

もうかれこれ三時間、この繰り返した。腰を屈め、腕に力を込めて作業をしていたので、節々に疲れがたまつて痛み始めている。

「よし、もう良いだろう」

地上の青年の言葉を受けて、屋根にいる少年はほうと白い息を吐き出す。それからスコップを手にしたまま、屋根にほど近い雪の塊の上に飛び降りると、器用に滑って地上に戻ってきた。

「ありがとうございます。陛下の騎士団の方々に雪おろしをしていただくなど」

二人の元へ腰の折れ曲がった老婆がやってきて、それ以上曲げたら人間として危険ではないかというほどに更に縮こまってぺこぺこ頭を下げる。

「いえ」

少年の心配をよそに、青年がやんわりと微笑んで、首を横に振った。

「我々はアイドゥール城下、ひいては国中の皆様のお役に立つてこそその騎士団だと思っています。今後もお困りの事がありましたら、どうぞお声をかけてください」

すらすらと口上が出て来るあたりは、伊達に十七年、ヒョウ・カ国王の直属騎士を務めていない。二言目にはエレはエレがの青年の意外な一面を見た気がして、少年はわずかに目をみはった。フェルム大陸の真ん中に位置し、比較的温暖なアイドゥールにも、冬は雪が積もる。若い男手のある家ならば、彼らが率先して雪かきを行うが、一人暮らしの者や老いた夫婦などには過酷な労働だ。

そこでヒョウ・カ王の提案で、冬の間は充分な訓練を行えない王国軍の兵や騎士達の基礎体力作りも兼ねて、彼らが城下の家々の雪おろしを手伝うのが、ここ十数年のならわしになっていた。今年は例年より積雪量が少ない。とはいえ、遷都から二十年近く経った今、特に小さな家の屋根に雪が積もりつぱなしでは、重みで家がぺしゃんこになってしまう危険性がある。それを回避する為に、兵士も騎士も階級に関係無く、体力のある者はこぞって街に降り、雪かきに勤しんだ。

少年——カナタも今は、騎士団の制服ではなく、防寒も兼ねたカーキ色の作業着に身を包んでいる。半年前まで見習い騎士だった少年は、夏の終わり、王国を覆そうとした反逆者を暴き出した功績で、肩書きから見習いが取れ、晴れて正騎士になった。肩に三級正騎士を示す金飾りが一本入り、胸に片刃剣と盾の紋章を抱く制服に変わった。紋章は、かつて大陸に存在した二大国家、セアクとイシヤナの統合を示す証だ。

新たな制服をまとつて襟を正したカナタを見た時の家族の反応は、実に様々だった。

妹のトワ、弟スウェンは『正騎士様だつて！』と腹を抱えて笑い転げ、双子の姉ミライは何がそこまでおかしいのか、笑い過ぎて一時呼吸困難に陥った。

心配性の母エレはそれでも気丈に『頑張ってくださいね』と淡く微笑み、そして父インシオンは『死ぬなよ』と、こちらの頭に武骨な手を載せ、ぐしゃぐしゃとカナタの柔らかい黒髪を撫で回したのである。

「カナタ」

名を呼ばれた事で、少年の意識は現在に立ち返る。数歩先に行く青年が、『ぼーっとしてると置いてくよ』と手招きで、来いと合図していた。

異なる未来からやってきて、故あって同じ時間軸に存在する事になったこの青年も、名前はカナタなのだが、

『この時代の「カナタ」は僕じゃなくて君だから』

と、皆に少年をカナタと呼ばせ、自分の事は『団長』と階位で呼ばせる事が多い。

昔は相当に傍若無人な性格であつたらしいが、歳を経て人生経験を積んだ事で『あいつも大人になつたつて事だろ』と父がうそふいていた。

スコップを肩に担ぎ、もう一人の自分に並んで歩き出す。

今日の雪おろしの任務は今の一軒が最後だ。すつかり冷え切つた身体を早く温めたい。父の直属部下であるリリムが振る舞つてくれる生姜入りの紅茶は、あつという間にぽかぽかになるのが好きだ。兵や騎士達を労う為に、彼女がその茶を淹れてくれている事を期待しながら、王城へ向かつて目抜き通りを歩いていると。

『今日頑張つたご褒美に、良い事教えてあげるよ』

隣を歩く大きいカナタが、天気の話でもするかのごとくのんびりと口を開いた。

『ユーリルがまた来るよ』

その言葉にカナタは思わず足を止め、翠眼を大きく見開いて、ぽかんと口を開けてしまう。もう一人の自分も立ち止まつて振り返り、にと口元をつり上げた。

『まあ今回は非公式っていうか、お忍びでの来訪だから、前回みたいに国を挙げてどうこうつて事は無いけどね』

ユーリル。その名を持つ少女の存在は、カナタの中で非常に特別な意味を持つ。

去年の夏、王国と西方に潜む反逆の芽を摘む為に旅路を共にした、西方最有力者の娘ユスティニア姫。道中は正体を隠し『ユーリル』と偽名を使っていたが、素性がわかった後も、カナタにはそちらの名を呼ばせた。

フェルムの王族を籠絡してこい、という彼女の父親の命によって、ほとんどはめられるように恋人のような関係になってしまったが、ユーリルはカナタを憎からず思ってくれているし、カナタもまんざらではない。ユーリルの父ユーカートと、カナタの叔父であるヒョウ・カ王が正式に文を交わして、将来カナタにユーリルが嫁いで、王国と西方の関係を強化する礎になる事が、この半年であつたという間に決まってしまった。

それを聞いた時の身内の感想はまたも玉虫色で、姉ミライは『あなたにお姫様の奥さんとか似合わない！』と大笑いし、弟妹も『お姫様、お姫様！』とテーブルに突っ伏してばし拳で卓を叩いた。

二人が恋に落ちる経緯を最も近くで見えていた大きいカナタは、『ま、当然だよね』としれつと言い放ち、父インシオンには『嫌々じゃねえんだな？』と、王国軍大将と父親、両方の立場から確認を取られた。

そして母エレは。

『あなたが本当に好きな人と結ばれるなら、私は喜んで祝福しますよ』

と満面の笑みでカナタに告げたのである。愛する人と添い遂げられる喜びを知っている母だからこそその言葉だと思ふ。『イシヤナの英雄』と『セアクの巫女姫』の子供、という大きな肩書きを一生背負ってゆく我が子達に、少しでも幸せに生きて欲しいのだから。

ユーリルに、また会える。その嬉しさが頬を温め指先に染み渡って、雪おろしで疲弊した身をじんわりと癒してくれる。

彼女に会えたら、どうしようか。前回は観光などしている場合ではなかったから、今度は城下街を案内したい。冬でも開いている店はアイドゥールにならんとある。西方には無いだろう服飾店で王国風の衣装を見繕って、一等の店でこれまた西方には存在しない牛の肉を使った料理をご馳走してあげたい。以前は彼女の獲ってきた猪の肉で閉口させられたが、立場が逆転したら、彼女はどんな反応を示すだろう。

ああそれとも、自宅に招いて母エレの手料理を振る舞う方が、王国の食事情がわかって良いだろうか。嫁と姑の関係というのは男にはわからない奥深さがあるらしいから、今の内に顔を合わせておくのが良いのかもしれない。でも、きょうだい達はユーリルに詰め寄って話を聞きたがるかもしれない。そうすると、ユーリルを疲れさせるだけか。やはり外で会った方が良いのだろうか。

「にやついてる」

不意に横から声をかけられて、カナタははっと素に返り口を手で覆う。妄想を巡らせて、顔に出ていたようだ。我ながら浮かれすぎだった。ちらと隣を見れば、大きいカナタはからかいの色を翠の瞳に宿してこちらを見下ろしている。

同一人物であるこの男には全てを見透かされているような気がするのが癪で、カナタはスコップを担ぎ直すと、殊更むっつり顔を作って、雪かきされた道をずかずか大股に歩いていった。

2 不穩の種

「団長」

城に戻ったカナタ達——というか大きいカナタを待ち受けていたのは、密偵のマリエルだった。半年で伸びすぎた前髪を短く切り、紫色の瞳がまっすぐに青年を見すえている。

「陛下がお呼びだ。執務室。大将もいる」

いつものように抑揚の無い声で彼女は淡々と告げ、用は終わりだとばかりにふいっと踵を返して廊下の向こうへ去った。

カナタ達は茶で身体を温める暇も無いまま、更衣室で作業着からいつもの騎士服に着替えて剣を腰に佩くと、早足で国王の執務室へ向かった。謁見の間ではなく執務室を指定してくるとは、内々の話なのだろう。

木製の扉の前に立って大きいカナタがノックすると、誰何の応えが返る。

「カナタです。小さい方もいます」

いくら自分の方が上背があるからとはいえ、十七の少年をつかまえて「小さい方」と言うのはいかなものか。だがしかし、二人は顔も声も同じなので、「カナタです」だけではどちらのカナタかわからない。不可抗力なのかと諦め半分になりながら、カナタはもう一人の自分が「失礼いたします」と扉を開くのに続いて室内に踏み込んだ。

「来たね」

二人のカナタがびしりと敬礼を送るのを見て、執務机に就いていた男性の、赤紫の瞳が優しげに細められる。褐色の肌に尖った耳介。かつて数百年の栄華を誇ったセアク帝国皇族の血を直系で受け継ぐ、生粋のセアク人である国王ヒョウ・カは、三十の齢を超えたとは思えない若さを残した顔に、ゆるい笑みをひらめかせた。

その傍らに立つ黒髪黒衣の壮年の男が、鋭い赤の瞳でこちらを見たが、気安く声をかけてくる事はしない。家では父子だが、ここでは彼——インシオンと自分は、王国軍総大将と一介の王立

騎士団員だ。一線を引いてめりはりをつけるのは当然の事であった。

「カナタも一緒なのか」

王は少年の方を向き、少しだけ困ったように目をすがめてみせる。

「……ご迷惑なら退出いたしますが」

新米正騎士が首を突っ込むべきではない、大人達にしか聞かれない話なのだろうか。無然としながら答えると、「いや」と口を挟んだのは父だった。

「あながちお前も全くの無関係とは言えねえ。話を聞け」

そう言われて、カナタは背筋を正し、傍らの青年にならって後ろ手に組んで直立不動になり、王の話の続きを待った。

「ツアラ地方の兵から報告があったんだ」

笑みを消し神妙な顔になった王は、机の上に肘をつけて手を組み、その上に顎を乗せて、眉間に皺を寄せた。

「怪物の目撃情報があった。姿形の特徴から、破獣カイダではないかと思われる」

破獣。その単語に、隣の青年が息を呑むのが、気配で伝わった。

千年の昔、南海の島国アルセイルで生み出され、大陸をも焼いた暗黒の遣い、破神クドミール。その血を浴びた人間は、死ぬか、破神の力の片鱗『神の力』を得るか、大半は異形の怪物、破獣と化し

たという。黒く固い皮膚に瞳の無い金色の眼球、蝙蝠のごとき一對の翼と、鋭い爪や牙を有した破壊の使徒のほとんどは、人間としての正気を失い狂って、人里を襲い血生臭い殺戮を繰り広げた。

破神の血を持つ人間は、破神や破獣になる因子を受け継いでゆく。その忌まわしき輪廻を断ち切って、破神の呪いから世界を解き放ったのは、『神の力』を持っていたカナタの両親や、その周囲の人々だ。大陸の多くの人は知る事の無い歴史で、カナタらきょうだいにとつても自分達が生まれる前の出来事で、『エレとインシオンの子供だから知る権利はある』という理由から、昔話として教えてもらっただけだ。

破神は母エレが持っていた濁り無き言の葉の力『アルテア』で完全に消滅した。破獣も世界から一匹残らず消え、『神の力』を使う事もできなくなつたはず。だのに何故今再び、破獣が現れるのか。

カナタが抱いた疑念は、当然ながら当事者だった大人達にはより一層深い疑惑として胸に根付いたらしい。父が赤い瞳を伏せがちにして腕組みし、呟くように洩らした。

「まだ人的被害があつた訳じゃねえが、牧畜が数匹、かなり無残にやられたらしい。報告にあつた殺り口は、間違い無く破獣だ」

数えきれないほどの破獣を葬ってきた父が言うのだから、その怪物が破獣である可能性は極め

て高いのだろう。いずれにせよ、人間が危害をこうむる前に対策を講じなくてはならない。そしてそれは、王国中に噂が広がり人々を不安にさせる前に、可及的速やかに行われなければならない。い。

「それで僕が呼ばれた訳？」

大きいカナタが翠眼を細め、覚悟を決めたようにひとつ、息を吐いた。

破獣の正体を知っていて、破獣と相対して生き延びた経験を持ち、今も破獣に立ち向かう力を有し、かつ比較的自由に動ける人間。それは大きいカナタしかいない。彼の双子の姉である大きいミライも対象の内だが、彼女は西方との関係を取り持つ為、相方のソキウスと共に現地に滞在している。今から呼び戻しては時間がかかるし、西方にも破獣の出現が伝わってしまう可能性がある。内輪だけで話を片付けるには、この青年に頼るしか無いのだ。

だが、かつて破獣に勝てる力を持つていたとはいえ、たとえ『黒の死神』の息子とはいえ、今の青年は人間の標準を遙かに超えた能力を持つている訳ではない。一人で破獣と渡り合う事は可能なのだろうか。カナタが不安を覚えて眉根を寄せた時。

「こいつも連れていっていい？」

もう一人の自分が、拳で軽くこちらの頭を小突いたので、カナタは驚きに目をみはって、思わず青年の顔を振り仰いでしまった。王と大将に許可を求める彼の眼差しは真剣で、冗談の一粒も

込めていない事がうかがえる。

「話を聞いた以上、部外者にはできないし、他に頼れる相手もないし」

「……やっぱり、カナタは居合わせるべきじゃなかったかな」

叔父王がそうぼやいて氷色の髪先を指でいじくり、父も苦い物を呑み込んだような渋い顔をする。だが。

「頼りたいのはやまやまだけど、それでカナタに何かあったら、姉上に申し訳が立たないよ」

ヒョウ・カはその言葉を聞いて、カナタの決意は定まった。

「行きます」

ぴんと背筋を伸ばし凜と声を張って、叔父に向けて強い視線を送る。

「おれ……自分も今は正騎士です。戦力に数えてください」

途端に王の瞳が真ん丸く見開かれ、父も軽い驚きを宿した表情で見つめてくる。

『エン・レイ姫の子だから』『英雄の息子だから』という事で、必要以上に丁重に接してこられたり、逆に敬遠されたりと、特別扱いを受ける事は、幼い頃から嫌というほど経験してきた。だが、いやだからこそ、こんな時まで親の名前に振り回されたくはない。母は心配するだろうが、迫る脅威の存在を知らながら、はいそうですかでは片付けは別の人にお任せします、と安穩とアイドゥールに留まる真似はしたくない。

それにもうすぐユーリルが王国にやってくるのだ。彼女を安全に迎える為にも、不穩の種は取り除いておきたい。

「……覚悟は決まってるんだな？」

確認を求めて口を開いたのは王ではなく、父インシオンだった。きりつと唇を引き結び、深くうなずき返す。父は顔をしかめてがりがりと頭をかき、彼が続けようとしていた台詞を、ヒョウ・カが引き受ける。

「では頼むよ、二人とも。くれぐれも気をつけて」

その言葉に、二人のカナタは示し合わせもせず見事に敬礼を揃えた。

当サンプルは、6巻の物語序盤です。
この先は、本編でお楽しみください。

Sample

七月の樹懶 たつみ 暁
URL:<http://july.main.jp/>
Twitter:tatsumisn